

国際業務報告

海外からの研修員受入れについて

1. はじめに

水資源機構では、国内のダムや水路等施設の建設・維持管理を通じてこれまでに蓄積した技術と経験を活かし、アジア地域の統合的水資源管理の向上を支援しています。その取り組みの一つとして、独立行政法人国際協力機構（以下JICA）を通じて水機構の職員をアジア地域へ長期派遣専門家として20ヶ国へ延べ65人を派遣しており（2010年8月1日時点）、参加しているプロジェクトの実施機関から高い評価をいただいています。また、アジア地域で水資源管理に携わる方々への研修支援も実施しています。本稿では、この研修支援についてご紹介します。

2. JICA の研修員受入事業

日本における国際協力・援助の代表機関であるJICAでは、多種多様な研修の実施を通じて150ヶ国から637研修、年間約10,000人の研修員を受入れています。水資源・防災分野については47研修の実績があり、後述する「統合的水資源管理」の分野では、水資源機構が培った高度な技術力を評価いただき、JICAと連携して研修を実施しています。

平成21年度に水機構が実施した研修には、部分的な受入も含め365人の研修員が参加しました。

研修一覧（平成21年度）

1	地域別研修「中東地域統合的水資源管理」
2	平成21年度集団研修「統合的水資源管理」
3	平成21年度（国別研修）インドネシア国「流域水資源管理」
4	平成21年度（国別研修）中国「節水型社会構築モデルプロジェクト（効率的な水資源管理）」
5	平成21年度（国別研修）イラン「総合的水資源管理（その2）」
6	平成21年度（国別研修）インドネシア「河川管理」
7	平成21年度（国別研修）中国「日本のダム運用管理」
8	平成21年度（国別研修）マレーシア「統合的河川流域管理」

3. 研修設計の概要

1) 研修テーマ

アジア・太平洋地域は、水不足（too little water）、洪水・災害（too much water）や、地下水開発による環境被害といった課題を併せ持つ地域です。また近年は、気候変動に伴う自然災害が世界規模で深刻化している状況にあつて、特に発展途上国では水問題の解決が重要課題となっており、そのため各々の地域特性に着目した水資源管理の計画・実施が求められています。

そこで、日本の知識や経験を活かし、効果的な水管理、効率的な水利用、高度な土地利用という観点に基づき治水・利水管理を流域全体として進めていこうという「統合的水資源管理」について学びたいというニーズが増えてきています。

2) 研修のねらい

統合的水資源管理についての研修の最大のねらいは、研修の最終時点で、研修生の自国における水資源管理の諸問題を改めて認識し、その改善に向けて何からスタートする必要があるのかといういわゆる「気づき」を研修員自らが見いだすことにあります。このため、各国研修員の問題点のプレゼンテーションから開始し、講義や現地視察を通して問題点解決のヒントを探させ、最後に帰国後の研修員自身の行動計画を発表する方式としています。

さらに、講義や現地視察といった具体的な研修設計に際しては研修員の視点に立った様々な工夫と配慮を要します。例えば、河川法や水利権など日本の河川行政を学ぶ場合には、その背景にある日本における河川の歴史など、広い分野の基本知識を事前に情報として提供することが必要です。また、研修員の興味や反応に応じて、臨機応変に講義内容を変更することも大切です。

4. 研修にまつわるエピソード (「中東地域統合的水資源管理研修」を例に)

1) 概要

本研修は4月1日から3週間の日程で行われました。統合的水資源管理というテーマのもと、日本の水資源行政や地下水行政、水環境行政について、各分野からの専門家から講義を受けます。また、座学だけでなく統合的水資源管理の具体事例を体験すべく、四国地方の吉野川流域と中部地方の木曾川流域への現地視察も実施しています。

吉野川流域では池田ダムや香川用水管理所、香川県綾川浄水場、香川用水土地改良区、吉野川北岸土地改良区を訪問した他、香川県政策部、徳島県河川局より講義を受けました。また、木曾川流域では長良川河口堰、愛知用水総合管理所、愛知用水土地改良区を訪問しました。知識欲の高い研修生からは多くの質問が寄せられ、回答する機構職員へのよい刺激となっていました。



講義風景 (徳島県)



浄水場の見学風景

2) 言語

本研修には、エジプト、イラン、ヨルダン、モロッコ、パレスチナ、サウジアラビア、シリア、チュニジア、トルコ、イエメンからの研修員総勢12名が参加しました。

このように複数の国から参加する研修では、通常は英語が使用言語となります。ただ、強いフランス語なまりの英語を話す者、英語を長らく使っていなかったため勘を取り戻すのに随分と苦労されていた者など、様々な方がいましたが、周

囲のサポートもあって無事に研修を乗り切っていました。また、今回はトルコの研修員以外はアラビア語を話すため、アラビア語が研修員の準公用語として大いに使われていました。

3) 思い出

吉野川流域の視察時には桜が満開の時期で、中東地域からの研修員を喜ばせました。また、四国出立の時は、徳島阿波踊り空港の開港日と重なり、研修員のなかには空港でテレビのインタビューを受けた方もいました。さらに、研修最終日に行われた研修成果発表会の会場に枝野大臣が来場されるなど、記念になる研修となったようです。



桜並木を歩く研修員

5. 今後の研修実施にむけて

研修というと講義による座学というイメージが強くなりますが、研修員から得た感想は、一番心に残りやすいのは実物を目の当たりにすること、まさに「百聞は一見にしかず」ということです。また、研修員と講師との双方向のコミュニケーションも内容の理解を深めるのに大いに役立ちます。

専門知識だけでなく、日本の伝統や文化を研修員に伝えることも大事なことです。休日には外出し、積極的に日本の文化に触れる努力をする研修員が多いことは、日本に対する理解の深まりとともに、今後のアジア各国との協力関係のためにも非常に良いことだと考えています。

今後も研修内容の改善を重ねながら、研修員の心に少しでも多くのものが刻み込まれるような研修を目指してまいります。



長良川河口堰を背景に記念撮影